

人間王族のΩのハレムに入る予定でしたが、深海の帝王に陸に帰れないほど犯されて深海の檻で溺れるほど愛される

つばある。

プロローグ

ただ、陸に歸りたかっただけなのに……。

弟と二人で草原の匂いをこの肺いっぱい吸い込んで、
駆け回って寝転がりたいたけなのに。それが私の夢だつ
たのに

暗く……海の底へと、引き摺り込まれていく。

ゴボゴボという。私の肺を満たす海水から私は逃れる
ことが出来ない。ああ、噛まれた頸が熱く反応する。今
宵も彼が来た。

（中略）

第二章 番との邂逅

人間の王族に余の「運命の番」を探す催しを申しつけ、陸へと上がる。

陸は、乾きがすごくてたまらないと思いながらもそのまま海水に乗って、人間の王族が用意した広場へと辿り着く。広場には余と余の臣下を迎える用意がしてあり、天幕が張ってありその中に余と臣下たちは座る。余たちの周りにΩの女性たちが侍っているが、酒を注いだり果物

を持つてきたり、うちわで扇いだり、海水を余たちの尾鰭にかけたりしているが扇ぐのは断り、余は皿に盛られているぶどうに手をつける。陸が唯一優れているとすれば、この甘く瑞々しい果物を生み出せる大地だろう。野菜もいい。

……この広場に着いてからというものずっと香つてきている。余を狂わせる香りが。近くにいる。「余の運命の番」が。この人間の王族どもが用意した広場でのΩたちの見定める場で。何人もΩが余の前に現れるが、どれも違う。

「これが最後の組です」

そう告げられ、最後のΩたちが余の前に連れて来られるがこの中にはいない。余が首を振ると

「そうですかでは、今回はこれでお開きということになります」

進行役にそう言われ余はギロリと見守る王族と進行役を睨みつけ椅子から立ち上がる Ω の女性たちがぎゃつと小さく声を上げるが気にも留めない。

「隠している者がいるだろう？」

「なっ、なんのことだ？」

でっぷりと太った人間の王は余に向かってそういう。余には分かっているここに余の運命の番がいるというところが

「なるほどな、では今からこの国を水の底へと埋めるとするか」

余が魔法を行使しようと手のひらを空へと掲げ手の中

に水球を作つていく一瞬にして広場を覆うほどの水球が出来上がった。それを見ていた人間たちは怯えていた。

「おつ、お待ちください」

でつぷりと太った王の息子の王子だったか？ が余に話しかけてきた。王子は顔は良く、王とは違つてすらりとしていた。地位と権力があり容姿に恵まれているが、戦いになど行ったことがないのだろう。綺麗な顔で綺麗な瞳をしていた。怖いもの知らずで余に話しかけてきた。とりあえず話だけでも聞かかと思ひ、水球はそのままに問いかける

「なんだ？」

「もう、三人ほどΩがいます」

そういつて連れてこられた三人のΩたち。なるほどな、

見た目が他のΩたちと比べものにならないくらい綺麗だ。着ている服から王族専用のΩといったところか。王族特権でΩを囲ってハレムを作り慰み者にでもする気なのだろう。Ωはαと同じくらい希少種だからな。それこそ王族にとってΩを得て子を成すということは次世代の強いαを手に入れると同意だからな。そして「運命の番」が現れてば余の様な上位種のαとなり、国を統べるに相応しい者が生まれる。この王族どもはそのために余からΩを隠していたのだろう。制裁はどうしてやろう。だがそれよりも、連れてこられた三人のうち一人から強烈に香ってくる。その一人のところに余は水を走らせて近づく。彼女を後ろから抱きしめすうーっと彼女の香りを鼻腔いっぱい吸う。ああ、私の半身だ。「運命の番」だ。彼

女は恐怖か？ はたまた余のフェロモンかに当てられたのか、膝が笑っている。「運命の番」を前に理性が切れかけていてフーツフーツという息遣いに余に怯えているのか、それとも余のフェロモンに当てられてるのだろうか？ ああ、愛おしい、欲しい、全てを喰らい尽くしたい、優しくしたい、彼女の全てに跪きたくなる。ああもう我慢できず彼女の頸に噛み付く。がちんと金属と余の齒当たる音が広場に響いた。彼女の首には王族専用の首輪が付いており魔力で封じられている。俺は舌を差し込んで彼女の頸を舐め、首輪の上から噛むけれど齒が貫通しないことに苛立って人間の王族達に

「今すぐこれを外せ、さもないとここを水底にするぞ」
余の言葉に怯えた王族達は魔力を注いで彼女の首輪を

外す。がじやんと外れ、ぶわりと香る彼女の香りが一層濃くなり、余は外れた瞬間からんからんという床に跳ねる音と共に彼女の頸に噛み付いた。ああ、甘く香る香りに頭がくらくらする。そして彼女の頸の柔らかさにも恍惚を覚える。

そのままゆつくりと彼女の頸から牙を離し彼女の甘みな血を舌で舐めとり飲み込む。どんな美酒よりも濃厚で甘くてうつとりと彼女を見つめ、彼女の唇に口付けをする。ああ、唇の感触がこれほど心地良いなど知らなかった。彼女の口に舌を挿し込み、唾液を舐める。ああ、なんて美味しいんだろう。世界のどんな美食よりも甘美な味がする。ゆつくりとまるで時が止まったかのように彼女の口内を味わう。ああ、求めていた。飢えていた。彼女

という「運命の番」に。この世でたった一人求めていた余の半身。くったりとした彼女を抱き抱え、

「彼女は余の運命の番である。今後彼女は余と共に」

「まつ待て、彼女は王族のΩだ」

「それがなんだ？ 下等な人間如きが余の決定に逆らうというのか？」

「い、いやっ、あの……その……」

「彼女は余の半身だ。お前達人間の慰み者などにさせない。余の「運命の番」であり花嫁として海底で暮らしていく」

彼女は頸を噛まれたショックとキスの影響で気を失っていた。都合が良いのでそのまま国に連れて帰る。人間は海では息ができないから余が魔法で、海底でも息が出

来る様に整えてやるただし、彼女は陸上でしか生活できないため、私の体液を媒体に息が出来る様にしないといけない。唇の接触で唾液を飲ませてなんとか国まで連れて帰る。もつと濃い体液をやらないと彼女は途端に息が出来なくなつて死んでしまう。ああ、私の運命の番はなんて可愛いのだろうか。余なしでは生きれないなんて。

深海へと私の番を連れてくる途中呼吸が苦しそうなので何度も口づけをし、体液を彼女の中に流し込む。それと同時に彼女の中に私の分身とも言える使役している妖精を忍ばせる。これで馴染んでくれば彼女の呼吸はなくなり楽になるだろう。妖精にも、毎日私の魔力を与えなくてはいけない。なんとも手間のかかる番だが。我には彼

女しかないのだ。彼女の持ち物を確認する。もし何か不審なものや危険なものを持っていた場合海底を危険に晒す恐れがあるからだ。彼女の荷物を改めると、対したものには彼女は持つていなかった。少額の金と、粗悪品の発情抑制剤を持っていた。こんな粗悪品を飲み続けたら彼女の身体に悪影響を及ぼしてしまう。最悪妊娠できなくなってしまう。それは余にとっては不都合極まりない。彼女には余の子を産んでもらわねばならん。次世代の上位種αを。だがそんなことがどうでも良くなるくらい余にとつて彼女は余の心を掴んで離さないこんな経験初めてで、余は自分が若造になった気になった。発情抑制剤は捨てておこう他には……鍵か、家のか？ 本当に彼女は少ない所持品しかなかった。

彼女を連れて、余の妃のために用意されている部屋に寝かせる。彼女の好みの部屋であればいいが。余は彼女の全てを叶えてやりたくなってしまう。余は彼女の頬を撫で

「ケーテ、ケーテはいるか？」

「王よ、ここにおります」

ケーテと呼ばれた人魚の女性は、茶髪に緑の瞳をしており尾鰭も平均的な銀の美しさの女性だ。派手な人魚族の中でもかなり控えめな容姿をしている。彼女を呼んだら泳いで余の前に現れた。

「ケーテ、今この時よりお前を余の妃付き筆頭侍女にする」

「ありがたき幸せです」

ケーテは、跪き余に忠誠のポーズをし彼女の筆頭侍女のなつた。

「余の妃には、全てを与えろ。教育、宝石、衣服、何でもない望むままに彼女に不自由はさせない。人間であるから戸惑うことも多いだろうがよろしく頼む」

「わかりました」

「ただし、一点、外には余の許可なく城の外に出すな。

余の庭には出してもいい、だが陸へ帰りたいや、余の庭である海底以外には出す気はない」

陸になど帰さない。何不自由なく余の側で微笑んでいれればいい。余だけの「運命の番」なのだから。

「はい」

「妃の言葉は余の言葉と思つて接しろ。ケーテお前なら偏見もなく、妃を導いてくれると信じているぞ」

「ご期待に沿えるように精進いたします」

ケーテなら何も問題ないだろう。彼女は余に忠誠を誓っている、なので妃が人間だろうと瑣末なことだと思つてゐるだろう。余の庭であるこの国の文化も遜色なく伝えるだろうし、いざとなれば余の変わりとなり彼女を守るだろう。あとは彼女がケーテと良き関係が築いていければ問題はないだろう。

第三章 海底を統べる帝王

私はぱちぱちと何度か瞬きをした。ここはどこだろう。青く光り輝くこの世界とは思えないほど美しい。水の中でそこからゆらゆらとゆらめく陽の光や魚たちが泳ぎ、見たことがない光景が広がっている。もしかして私は死んでしまったのだろうか？ 少し身じろぎをしてズキつと痛む頸にここが現実だと言うことを思い出す。

「妃殿下、目が覚めたでしょうか？」

私に話しかけてきた女性には茶髪に緑色の瞳をしていた。ゆつくりと私のそばにくる。……足がないがその代わりに銀の尾鰭が着いているあれは人魚なんだろうか？

「妃殿下、本日より貴方様の筆頭侍女となりました、ケーテと申します」

私はなんのことかわからずまた何度か瞬きを繰り返す。

「妃殿下？　どうなさいました？」

「妃殿下って？」

ケーテと名乗る彼女に私は問い返すと彼女は

「我らが偉大なる王の運命の番様である、貴方様のことです」

「え……えーっと」

私は広場で起きたことを思い出していた。そうだ私は

Ωの一人として人魚の王の前に差し出されたんだ。ただ勝手に私の頸を同意なく彼は噛んだ。私は強制的に番にさせられたんだと思うと身体がぶるりと震えた。確かに人間ではない。彼には足ではなく尾鰭がついていた。けれど人間の王族とも引けを取らないほどの顔立ちに、何より、あの体躯。私の力でなんて絶対に抵抗しても押さえ込まれてしまう。それと……

「ここはどこですか？」

「ここは我らがリヴァイアス陛下が納める、海底でございます」

海底……、私海の中にいるんだ。けれどなんで呼吸できているんだろう。私たち人間は海の中では呼吸していることなんて出来ないのに。部屋を見渡すと海底とは思

えないほど豪華な調度品が並べられていた。

「妃殿下、身支度をさせていただきますね」

私は平民だったからこんなに丁寧に丁寧に扱われることなんてなかったから

「いつ、いえッ……自分でやります！」

「いけません。妃殿下。あなた様のお世話は我らが王様の頼みでございます。あなた様のお世話をさせていただきます」

結局私は逆らうことが出来ずに私よりも絶対に身分が高いであろうケータに世話をされる。まずベットから起き上がり、顔を洗うという海底なおかしななと思いながら言われるまま顔を洗う私の服はどこから取り寄せたのかわからないけれど人間用の服を用意されていてそ

れを着させてもらう。こんな上等な布地の服なんて着たことがない。

「人間とは不思議ですね。どうしてそう泳ぎやすくなきそんな服を纏うのですか？」

ケーテではなくもう一人の若い侍女が私に質問してきたがケーテがそれを嗜めているのを見て

「良いのよ。私は人間ということとは変えられない事実だから。人間は高貴な人ほど動かない生き物だから動き辛そうな服がファッションとしても地位が高いことも証明してるの」

そういうとケーテや他の侍女たちもそういうものなのかという顔をしていた。私が着替えて、髪も手入れしてもらおうとコンコンと控えめなノックの音が聞こえケーテ

が対応にでるとそのまま私の答えは聞かずに来客が通さ
れた。

「目覚めたか？」

私の頸を強制的に噛んだαが目の前に現れた。私はそ
の場で深海の帝王リヴァイアスの前で膝を折って平民と
して王族に対する礼をする。

深海の帝王リヴァイアスは私を見つめ、私に手を差し
伸べるのでおずおずとその手をとると私はその場に立た
れるが私は平民だ。ご尊顔を見るなど不敬に当たってし
まうのだからリヴァイアスは私の顎をすくうと私の瞳を見
つめて

「その服良く似合っているな。陸で注文した甲斐があつ
た」

陸？ 陸との交流があるということだろうか。なら……望みはあるかもしれない

「お前は余のたった一人の『運命の番』なのだ。他の誰にもお前を非難することはできない。なぜなら余の次に海底で権力を持つのはお前ということになる」

「そつ、それは……」

「お前は余の妃となる。これはお前が余の『運命の番』だからだ」

「海底の帝王リヴァイアス様、発言をお許しください」

「遠慮は今後いらない。お前は余にたった一人だけの運命の番だ。余にいつでも気軽に話しかけていい存在だ」

私を見つめる瞳は陸で見たときの鋭さなどなくただ蕩けるように甘い眼差しで見つめられる。

「リヴァアイアス様、お願いがあります。陸へ一度帰してはいただけませんか？」

私のこの言葉でリヴァアイアスの瞳が先ほどまで甘かったのに急に鋭く射抜くような目つきになる

「お前はこの海底からは陸には帰れない。何故なら余がないと陸に辿り着くまでお前の息が続かないから」

「どういうことですか？」

「お前は余の魔力でこの海底で息ができるようになってゐる。この部屋にもお前が息苦しくないように膜が張つてあるがそれだけでは不十分のため、この海底で息をしていくためには定期的に余の体液を摂取しないとここではお前の呼吸は止まつてしまう」

「えつと……それはどういう……んっ……あつ……やッ

……」

リヴァイアスは私にキスをし、唇を割り、舌を口の中へと挿し込んできた。私は抵抗しようと手を振り上げようとしたがリヴァイアスに捕まえられてそのまま口内をぬるぬるとした舌で弄られる。

「日に一度以上、余とこうやって体液を身体に取り込まなくてはいけない。でないと苦しい思いをするのはお前だ」

ただ舌を挿し込まれて口内を舌で蹂躪されただけでカクンと腰がいうことを聞かなくなってしまう、私はリヴァイアスに支えられる形となった。

「しばらくこのベッドで大人しくしておけ」

「陛下お願いします。陸へ帰してください」

「陛下ではなく先ほどのように名をまず呼べ」

「リヴァアイアス様……お願いします。陸へ」

「お前が陸へ帰ったところであの人間の王族たちの慰みものだということはわかつているのか？」

「わかつています。私は王のハレムのΩになるためにあそこにいました」

私の言葉に気を悪くしたのかリヴァアイアスは私の服を裂き、ベッドへと乗せた

「お前が誰の番か思い知らせる必要があるらしいな」

ぶわりとリヴァアイアスから香ってきたむせ返るような香りに私は、自分の中のΩ性を引きずり出される感覚がする。抑制剤を飲んでいたにもかかわらず、喉が渇き、はあはあと浅い呼吸になる。これは息苦しいのではなく

飢えに近い。身体の奥底が熱くなり、リヴァアイアスの顔を見るとどくんと心臓が跳ねた。これは上位種の α が誘発的に Ω を発情させることができるラットだろう。身体が熱くなつていうことを効かなくなる。

「はあ……はあ……んっ……たすけて……」

「今樂にしてやる」

そういうとりヴァイアスは私の唇にキスをする。

「んっ……あっ……やっ……」

舌を差し込まれ、逃げようとすると舌を簡単に絡められ、じゆるじゆると舌を吸われ、苦しくなつてリヴァアイアスの胸を叩くがりヴァイアスは私の抵抗を私の手首を掴んでやめさせながらも私の唇からは放さない。何度も繰り返され私の身体から力が抜けるとやつと唇を離し、

そのまま飲み込めなくなってしまった唾液をリヴァアイアスは舐めとる。私はリヴァアイアスの人ならざる瞳に見つめられ身体がぶるりと震えた。リヴァアイアスが怖いとかそういう震えではなく確実にじくじくと侵食される感覚に近い震えだった。リヴァアイアスは私の服を脱がせていく。ただ、陸の服は脱がせたことがないのかかなり拙い感じで脱がせに来るから、私は脱がされないように工房している」と

「お前、ヒートを起こしているのに良いのか？」
「……」

辛くて、おかしくなりそうだけれどここで屈する訳にはいかず、リヴァアイアスの言葉には何も返さない。

「Ωのヒートは辛いだろう。余たちαの発情よりも。沈

めてやるからこちらに來い」

「いやっ……、私は……はあっはあっ……陸に帰ります
……はあっはあっ」

「余の運命の番であるお前を余が手放すと思つてゐるの
か？ 折角綺麗に着飾つたが仕方ない」

リヴァアイアスはそういうと私を捕まえると、ビリビリ
と服を破いていく。

「陸に注文した服はまだある。一着や二着ダメにしたと
ころでどうということはない」

ああ。この一着で一体何回弟の薬が買えるのだろうか
？ 考えるだけで眩暈がしそうだ。けれど音を立てて裂
かれた布から私のおっぱいが飛び出る。飛び出たおっぱ
いをリヴァアイアスが逃がす筈もなく、もみもみと揉まれ

る。

「んっ……、あっ……」

誰にもそんなイヤらしく触られてことがないので変な感じだ。優しくけれどしつかりと胸を揉まれていると今度は胸の中心にある乳首を指でつままれて

「ひゃっ……んっ……」

驚いて変な声が出て思わず私は口を抑える。自分でも出したことがない声でたことに自分で驚いてしまった。「どうした？ そんなに気持ちいいのか？」

ニヤニヤと笑っているリヴァイアスに私は恥ずかしくなつて真つ赤になつていたりリヴァイアスは気をよくしたのか私の乳首から手を放して、べろりと舌で乳首を舐められた

「きゃんっ……っあっ……んっ……やっ」

リヴァイアスはぬるぬるとした熱い舌で何度か乳首を舐めながら私の反応を見て、じゅるるると乳首を吸ってきた。なんとも言えない感覚に自分でも声が抑えられなくなつて鼻にかかったような声がでてしまう。

「気持ち良さそうだな？」

「気持ちいい？」

私は全部初めての感覚によくわからなかった。何度もリヴァイアスにおっぱいを揉まれながら乳首を吸われてだんだんと身体に教えられているような感覚になる。おっぱいを堪能するとリヴァイアスは私のお腹を優しく手のひらで撫でながらどんと下へと下つて行く、太ももの付け根に手が当たつて思わず脚を閉じると、リヴァ

イアスは太ももを撫で私がびくんと反応しているのを見て、膝を手のひらで覆って、ゆつくりと膝を割り開かれた。まじまじと中心部分を見られて

「いやっ、やっ、見ないでっ」

「ちゃんと濡れてるではないか？」

上機嫌な声のリヴァイアスに私はとても恥ずかしくな
って顔を覆っていたが、そのまま中心部分を手で隠すと
リヴァイアスに優しいけれど少し乱暴に手を退けられ、
「隠すな、お前の全ては余のものだ。余がお前の全てを
暴いてもいい運命の番なのだ」

「いやっ……そんな汚いところっ……見られたくない
っ」

リヴァイアスはくつつくと笑って

「汚い？ 何をいう。ここで余の子種を受け止め赤子を育むのだ。神秘以外の何物でもないだろう」

「えっ……」

どうやら人間と海底では感覚の違いがあるのだろうか？　と思つてしまった。私の思考が少し外に向いているとリヴァイアスが私の内腿を優しく壊れものを扱うように撫でる。その感触だけで身体がびくびくと反応してしまふ。

「人間とは本当に不思議だ。この細い二本の足で陸を歩き回っているのだから」

私たち人間なんて海底の住人からしたらきつと気持ち悪いのだろうなと思つているとリヴァイアスは私の内腿に頬を寄せて

「ああ、余の妃の脚だと言うと、なんだがとても唆られるな。普段はこんなことを思つたことがないのに余たちにはないものを持つてゐることがこれほどまでに神秘的でエキゾチックで、とても愛おしくてたまらない」

頬ずりされて驚いてゐるとリヴァイアスは

「ああ、たまらないな」

頬ずりしてゐたと思つたら今度は内股にキスされてびくびくつと身体が跳ねる。

「脚も感じるのか、なら……」

リヴァイアスは私の足を捕まえてそのまま足の親指を口に含んだ

「やつ……きたなつ……んつ……やつ……」

足裏に口づけをされてびくんと身体が跳ねた。

「不思議だな。お前の足ならいくらでも舐めたいと思つてしまう。人間の足になど興味がなかったしおぞましいとも思っていたのにお前の足ならば良いと思つてしまうな」

リヴァアイアスはそんなことを言いながら私の足を舐め続ける。恥ずかしいやら、くすぐったいやらよくわからなくなっている。とリヴァアイアスはそのままぐつと脚を持ち自分の身体をねじ込んできた。そのまま私の内腿を手の甲で撫でる。それだけで身体が跳ねてしまう。リヴァアイアスは私の太ももの付け根にキスをしてどんどん中心に近づいてくるので私は咄嗟に隠すとリヴァアイアスに手を握られて

「おいたする手は余と握つておこうな」

そういつて指を絡められて逃げられなくなるともう片手でリヴァイアスの頭を近づけさせないようにするがリヴァイアスは御構い無しに私の中心にあるクリトリスに触れる。指で優しく摘まれて体中に電撃が走ったような感覚に身体が仰け反る。

「ひやつ……んつ……やつ」

リヴァイアスは私の反応に気をよくしたのか指で優しく小刻みに動かされて

「あつあつ……やつ……んつ」

全身がゆうことを聞いてくれなくなる。びくびくびくつと身体が仰け反って脚がピンつと張る。リヴァイアスは私が可笑しくなる寸前でその行為をやめた。私ははあはあはあと息を繰り返しているとリヴァイアスは私の両

手に指を絡めて繋ぐと私の中心に顔を近づける。私は咄
嗟に腰を逃がそうとしたけれど手を繋がれているため逃
げることが出来なかった。リヴァアイアスは私のクリトリ
スを優しく口に含んだ。リヴァアイアスの舌に包み込まれ、
熱くてぬめぬめとしていた今まで感じたことのない感覚
に腰が跳ねる。私が逃げようとしても手を握られて逃げ
ようとするたびに引き寄せられて逃げられない。リヴァ
アイアスは今度は舌で突くようにクリトリスを刺激され

「あっ……んっ……やっ……んっ……」

私が気持ち良くなっていることはリヴァアイアスには手
に取るようにわかるようで今度はじゅぶっじゅちゅる
つと卑猥な音を立てて吸われる

「ひゃんっ……やっ……ひゃっ……」

私が気持ちよくて腰が跳ねて暴れるけれどリヴァアイアスはそのを抑えながら私のクリトリスを責め立てる
「変っ……変なのっ……ダメっ……なんかっ……出ちゃう」

私は腰をびくんびくんと跳ねさせながらぴゅっ、ぴゅ、しよわあつと何か出てしまった。リヴァアイアスと目が合ったけれど私は恥ずかしくなつて目を逸らすとリヴァアイアスは顔にかかったものをペロリと舐めて

「やつ、汚いっ……」

「人の顔に盛大に潮を吹いておいて汚いなど」

「しお？」

「気持ちよくなつて液体が身体から分泌されたのだろう？ それは生理現象とは違う」

「でっでも……」

「そんなに気になるか？ 問題ないだろう。それにしても気持ち良すぎて潮を吹くなどハレムに入るだけの素質があるな」

私が言葉を発そうとしたけれどリヴァイアスが唇を塞がれてしまう。

「んっ……あっ……んっ……」

舌を絡められて息も絶え絶えになつているとリヴァイアスが私のおまんこの中にぬぷつと指を挿れてきた。ゆっくりと中を探るようにと奥へ挿れられた指を私が驚いてぎゅうつと締め付けてしまうと

「狭いな……、処女なのか？」

私は恥ずかしいやら、怖いやらで少し涙が出てしまつ

た

「大丈夫だ。大丈夫。痛いならやめる」

痛みはあまり感じてないが涙がでた事と初めてのことばかりの事で驚いている。けれど今やめられたら発情でもつと苦しい思いをすることはわかつていたのでリヴァイアスに首をふり、リヴァイアスが指を引き抜こうとしてる腕に手をのせて

「お願い、やめないで……」

「……っ」

息を呑んだリヴァイアスは

「あまり煽るな……余もこれでも我慢をしているのだ。あまり可愛いことをすると抑えが効かなくなる」

私には煽っているということがよくわからなかったが

リヴァイアスの様子からすると劣情を誘ってしまったということなのだろう。けれどリヴァイアスは焦った様子や乱暴にするという様子はなく、おまんこの中をくにと指で弄られる。ゆっくりとにゅぷつにゅぷつ、ぬぷつと抜き差しをされたと思ったら今度は指をクイツと少し曲げて私のいいところを探している様な感じた。

……にゅぷつ……ぬぷぷつ……つくいつ♡♡

何度か探るように触れられるとびくんと強く感じる場所があった

「んっ！……やっ♡……」

私が思わず体を振るとリヴァイアスはその抵抗さえ抑え込むように手を強く握られ体重をかけられる。

「ここか、もつと素直に身体で覚え込めばいい」

リヴァイアスは私の耳元でそう囁くと何度も執拗にそこを擦る。おまんこからぬるぬるとした液体が分泌されるのがわかる。内腿を濡らすので私が脚を閉じようとするとリヴァイアスの身体で阻まれる。リヴァイアスはそのまま指を入れたまま指の親指で器用に私のクリトリスを刺激する。

「ああっ……やつ……んっ……だめっ……だめっ……変っ、変なのっ……」

「大丈夫、そのまま身を委ねて余に任せろ」

私はその言葉に恥ずかしいやら委ねていいのかわからなくなるけれどそのままびくんびくんと身体が跳ね、身体が私の意志ではなくビクビクとしばらく震えていた。

く中略く

「リヴァイアス様、お願いします……。陸に……。陸に返してください」

「それは出来ない。お前は余の番だ。余のそばで余の子を産むのが役目」

「お願いします……。陸に……」

弟が、このままでは弟が死んでしまう。

——ヒロインは果たして陸に帰れるのか？ 弟の命は助かるのか……？

リヴァイアスの重い愛は、執着は受け入れられるのか

？

海底の王の重く深い執着の溺愛は、ぜひ本編でお確かめください。

——次なる「溺愛」が、あなたを待っています。

サークル【つばある。】がお届けする、今後の濃厚ラインナップ。

よろしければ、サークルフォローをして、彼らの溺愛執着の始まりをお待ちください。

■ 2026年 十月発売予定 ..

【スポーツ選手との恋路】

「スポーツ選手×捨てられた元恋人」

捨てられたとわかっていても彼を目で追いかけてしま

うヒロイン。でもヒーローは恋人と別れたつもりも捨てたつもりもなく、ヒロインの素っ気ない態度に執着が爆発してしまう

甘く、深く愛される物語をこの秋に発売します。

十一月以降も新刊を予定してますのでお楽しみに！
予定を少しだけ

・ 幼馴染×他の男と付き合い合っていたヒロイン
・ 双子のエルフ×エルフにだけ媚薬体質の人間の国の
姫

・ 隣国の王子×姫、ただし隣国は倫理観がおかしい。
などなど予定しております。

「今回の『海底の王』の愛が気に入って、十月まで待てない！」という貴女へ。

現在、こちらの【重い愛のヒーロー】たちも配信中です。今すぐ狂った愛に溺れませんか？

▼絶賛配信中の既刊ラインナップ

・2026年8月作…【主従3pヤンデレ】

「最愛の人外下僕たちに嫉妬狂いで犯されて——美しい鬼と闇堕ち九尾の狐に、双子を孕むまで同時に種付けされ尽くす濃密3D異種婚姻交尾」

(二人の下僕たちに重めな執着の末溺愛されます。)

https://www.dlsite.com/girls/work/=product_id/RJ01661189.html

【スリル多めのサスペンス系ヤンデレはこちら】

・2026年4月作…【マフィアのヤンデレ】「【記憶改竄】非情なマフィアの甘い罠。宿敵を愛するよう認識を塗り潰された、潜入捜査官の無残な快樂堕ち」
(引き返せない世界の底で、容赦なく囲い込まれる狂愛)

https://www.dlsite.com/girls/work/=product_id/RJ01604817.html

・2026年6月作…【夫のヤンデレ】

「偽りの無精子症、優しき夫の狂愛、孕みたくないのに
孕まされる夜」

（夫の底知れぬ狂愛に孕まされる）

[https://www.dlsite.com/girls/work/=product_id/
RJ01645807.html](https://www.dlsite.com/girls/work/=product_id/RJ01645807.html)

お気に召しましたら、ぜひサークルフォローをお願い
いたします。

貴女の夜が、彼らの愛で満たされますように。

奥付け

作品名: 人間王族のΩのハレム
に入る予定でしたが、深海の帝王に
陸に帰れないほど犯されて深海の檻
で溺れるほど愛される

著者名: つばあゐ。

イラスト: 間内 瑠

発行日: 2026年9月5日 (第
一刷)

連絡先: [https://www.pixiv.net/
users/23830593](https://www.pixiv.net/users/23830593)

禁止事項: 「無断転載・AI学習禁
止」